自立の道を選んだ矢祭の町
—独自の子育て支援事業に着目して—

博士前期課程 1 年 教育学専攻
紅　桂 蘭

はじめに

「地方自治の本旨に基づき、矢祭町議会は国が押し付ける市町村合併には賛意できず、先人から享けた領土「矢祭町」を 21 世紀に生きる子孫にそっくり引き続くことが、今、ここに生きる私達の使命であり、将来に禍根を残す選択はすべきではないと判断しています。よって、矢祭町はいかなる市町村とも合併しないことを宣言します。」[1]宣言のとおり、矢祭町は自主独立の道を歩むとした。今度の矢祭町自立の町づくりの中で子育てに対しての支援が重視され、重点に町の未来の担い手となる町民すなわち子どもたちの教育に力を入れている。

1．行政からの支援（財政）

「入るを量りて出るを制す」という財政の基本のもとで、さまざまな改革が行われている。ここで、人件費、物件費、補助金…を削減したことに対して子育てに関する公共サービスを上げたのである。今までに実施した重点改革[2]によると人件費の改革を通じて議会議員 18 名から 10 名になり、議会費全体で 30,605,000 円が減額となっている。物件費も嘱託職員の削減により 34 名から 6 名に削減し、81,195,000 円の減額となった。しかし、子育について、①「第三子誕生祝金」がある。第三子以上が誕生した年に 50 万円、健全育成奨励金 5 万円（10 年間）、計 100 万円支給する[3]としている。②保育料も平成 18 年度より今までの保育料の半額になった[4]。

つまり、人件費などの改革により出るを制しているが子育てについての支援については積極的に取り組んでいる。

2．ボランティアと家族の積極的な参加

上記に述べたように人件費、物件費、補助金等を削減しても子育てに関する公共サービスを上げるという財政面での支援が見られる。一方、「読書」でまちづくりという文部科学省の指定を受けた矢祭町は読書運動の展開が始まり、町行政以外に学校関係者や PTA 関係者、ボランティアの方々と一緒に読書習慣をつくろうとしている。読書運動は読書だけではなく、学校と図書館が連携し、矢祭もったいない図書館内で「子ども司書」の活動を行った。「子ども司書」活動を通じて、子どもに読書の楽しさを伝え、子ども司書の育成を図った。

このように、矢祭町は子どもの育成のため学校だけではなく、学校外の読書の場を提供し、読書の楽しさを伝える環境をつくっている。活動も「矢祭読書のまちづくり」応援団長、ノンフィクション作者・柳田邦男氏の全面的な協力を受けている。

３．今後の課題

矢祭町は独自の町をつくるという過程で町の未来の担い手となる子どもたちに支援の力を入れ、行政、「矢祭町子ども読書の町づくり推進委員会」から学校、家族まで協力していることが見られる。これらで住民の積極的な参加があり、矢祭のこのような独自の町づくりの活動は長期的に続いていくかという課題になる。さらに、自分の町を自分でつくるという人々のアイデンティティという視点からの調査も求めていると思う。

【注】

[1] 「市町村合併をしない矢祭町宣言」平成13年10月31日。
[2] 「元気な子どもの声が聞こえる町」平成21年度、p. 7。
[3] 木谷忍・白石勝夫・高信由美子「小さな自治体、矢祭町の挑戦―町民主役を実現する行政が目指す自立の町づくり―」、『計画行政』第28巻4号、p. 68。
[4] 「元気な子どもの声が聞こえる町」平成21年度、p. 10。